

二月の
人形浄瑠璃



交樂庵
疾

下 戦 決

二日月の形浄瑠璃

——演出總形人・線味三・夫太——

(部 の 晝)

西亭作詞並作曲 藤間藤三郎振附
新作 節

伊賀越道中双六分

岡崎の段

木村富子作 鶴澤道八作曲 山村若子振附
新作 小 鍛

明烏六花曙治

山名屋の段

★十五日より晝夜の狂言入替上演致します★

(部 の 夜)

紫紅山人原作 坂東三津之丞振附
鶴澤重造作曲 大塚克三監劇
新作 末 廣

一 谷 嫩 軍 記

引ぬき團子賣
熊谷陣屋の段

壹 阪 觀 音 靈 驗 記

澤市内より壹坂寺の段

昭和二十年二月初日

(二十五日迄)

初日：晝十一時・夜四時 二部
毎日：晝正午・夜四時半 開演

● 一部料金 ●

一等席 五 圓

二等席 二圓四十錢

三等席 八 十 錢

(各等入場稅共)

一 等御座席 是五日前より
一 等椅子席

前賣切符發賣致し居ります

前賣切符專用電話

南 ④ 四七一 一番

一般御用の電話

南 ⑤ 三〇三 二番
三七七八番

節分

(豊竹呂太夫 竹本伊達太夫)

竹本七五三太夫

(竹本津磨太夫 豊竹宮太夫)

豊竹松島太夫

鶴澤清二郎

野澤吉三郎

野澤錦糸

鶴澤友平

(豊澤仙助 豊澤廣助)

有徳人 吉田玉助

次作 吉田光造

瓢六 桐竹紋十郎



新作 節分

抑々追離式を申するは、これ立春の儀式にして天に拜すは悪魔降伏、地に祈らんはけがれ不浄、四方を祓ふ節分會

へされば浦々家毎に春立ち初むる夕べより 明る佳き年人々の願ふや豆の厄拂ひ

これは節分會に當り、ある果報有徳人が趣向を立て、召使ひの次作に妻を持たずと悦ばせ、今一人の瓢六を花嫁に仕立て、己が仲人し、終に正体現はれ、果ては笑ひの中に一家揃ふて悪魔諸疫を祓ひ淨めるさいふ筈に縁起よき新作所作事の秀麗でございます。

お願ひ

★場内では脱帽禁煙を堅くお願ひ致します

★場内は清潔に、紙屑その他の物はお互ひに一さまさめに
お願ひ致します

★晴雨にかゝわらず必ず上草履を御持参下さいませ——靴、
草履のお客様はそのまゝはいつて頂きますので至極便利
でございます

伊賀越道中双六

岡崎の段

竹本住太夫
鶴澤重生太夫
竹本相五郎
野澤吉五郎

後竹本大隅太夫
編澤清八

蛇の目眼八 吉田藤一

唐木政右衛門 吉田玉助

捕手 小頭 吉田兵次



伊賀越道中双六

岡崎の段

天明三年四月竹本座初演。作者は近松中二、近松加作。忠臣蔵、曾我兄弟と共に日本三大敵討の一つ、荒木又右衛門の伊賀越の敵討を骨子としたもので近松東南作「伊賀越乗掛合羽」の改作で、全曲は第一編が岡の段、第二行家屋敷の段、第三圓覺寺の

段、第四郡山宮居の段、第五郡山屋敷の段、第六沼津の段、第七關所の段、第八岡崎の段、第九伏見の段、第十敵討の段の十段からなつてゐる。この中、第五、第六と共にこの第八岡崎の段が有名でございます。

岡崎も此所は宿はづれ、山田幸兵衛の住居であります。先刻娘お袖が案内して戻つた若侍こそ、櫻田林左衛門から頼まれた武士の年格好です。尙も探らんさ蛇の目の眼八はそつと裏手から廻つて、其所に在つた長持の中へ身を忍ばせました。藤川の新關を破つてやつこ此所迄抜けて來た唐木政右衛門は、打掛る捕手を相手の手練を、老の眼凝らして見てゐた主幸兵衛は、やなら門口へ姿を現はし、之は吾らが知人 決して武士ではない。關破りさ間違へて此間に眞の關破りを逃してはさ、役人を引取らせました。そして強つて政右衛門を内へ招じ入れ、行燈かき立て見合す顔。さ、二人は元の弟子師匠であつたのです。

政右衛門は尋れられるままに、只今は浪

山田 幸兵衛 桐竹門 遣

幸兵衛 女房 吉田 多三郎

歩き 小助 吉田 常次

女房 お谷 桐竹 龜松

夜 廻り 桐竹 紋太郎

和田 志津馬 吉田 文枝

娘 お袖 桐竹 紋司

捕手 大 ぜい

々の身の上のみ、敵を尋れる身の油断なく、好い程の事を云ふてある處へ幸兵衛の女房も出て来て、幸兵衛共々娘お袖が聳たる可き股五郎を敵と睨ふ和田志津馬、殊には助太刀の其姉蟹唐木政右衛門と云へるが武藝の達人、これが怖しい故掣の助太刀を頼むと云ひますので、驚いたのは當の政右衛門であります。併し早く知りたは股五郎が在所と、急ぎ立つ折柄、長持の中の眼八がソツと覗いたのを幸兵衛が氣づいて話をそらします。其所へあるきの小助が、庄屋方から急用なりとて幸兵衛を迎へに來ました。入達に政右衛門が圓に残せし女房お谷は、夫や弟が敵を探す辛苦を思つてはぢつとしてゐられず、又一ツには嬰兒の顔も見せたく、順禮姿の道中を、遙々さまよひ來る中、持病の瘰にせめられて偶然にも此家の門口に打倒れました。其物音に何氣なく外を覗いた政右衛門は、包む我名の露れ口、ああ折悪い處へと、政右衛門が心中の四苦八苦、隙を見て政右衛門は四邊に氣を配りつつ焚火をしてソツとお谷を呼生かします。お谷の嬉しさ、政右衛門の苦衷、それとて今宵ただ今敵に出會う大切な瀬戸、

其方が居ては事の破れ、嬰兒はしかと預つた。と囁んで含める様に慰め勵まして外へやるかやらぬに主の幸兵衛も歸つて來ました。そして股五郎に引會せ様と云ふ時、奥から走り出た老婆は嬰兒を夫に見せながら、其中着に唐木政右衛門の一子と記してあつたこと云ふので幸兵衛も之は好き人質と喜ぶのでした。それを矢庭に奪ひ取つた政右衛門、何思つたか嬰兒を刺し殺し、これはと驚く幸兵衛に向つて、我これに在らば、政右衛門と云へる奴討つに何の手間ひま、今此の伴を刺殺せしは門出の血祭と、勇むも悲しい心の中、それをば幸兵衛も曲者、何氣なく勇氣の程を褒め、老婆を奥へ立たせて其股五郎を呼ばせると、互ひに見合ふて吃驚、それも其股五郎と云ふのは實は志津馬であつた。呆れる二人を満足氣に見やつた幸兵衛。我が心中を打ち明けて、殊には政右衛門が我子を殺して敵を討る武士道を賞し、股五郎の肩持つ意地も、これ限り變らぬものは子の可愛さと嬰兒の骸を佛間へ送り、扱眞の股五郎は、藥師堂を出越しに落しやつた事を語り、眼八を斬つて捨てて二人を勵まし發たせてやるのでした。

小鍛冶

老實は稻荷明神翁 (豊竹呂太夫 竹本伊達太夫)

小鍛冶宗近 (竹本源太夫 竹本雛太夫)

勅使道成 竹本重太夫 豊竹富太夫

(野澤喜左衛門 野澤友衛門)

野澤吉三郎 野澤錦糸

野澤寛弘 野澤清二郎

小鍛冶宗近 桐竹紋司

老實は 稻荷明神翁 吉田榮三郎

勅使 道成 吉田玉市



新作 小鍛冶

能にある「小鍛冶」をもとにしてなつたもので、刀鍛冶三條小鍛冶宗近が勅命で御劔を打つ事になつたが、勝れた相鎚が無い爲め氏神の稻荷明神に祈願をかける。氏神の稻荷明神の御神體が現はれて宗近を助け相鎚に立つて小狐丸の名劔を鍛へ上げ、勅使道成に奉る。云ふ筋でございます。

床本抄

これは三條の小鍛冶宗近にて候、さても此度大君より御劔を打ち奉れ、かしこき宣旨を蒙りつゝ、かゝる大事をさらんに

は、我に劣らぬ相鎚の者ありてこそ御劔も成就なすべけれ。口惜しくもそれほどの者無しと答へまつらんには勅諭を背くのおそれ、いかにせむ、此の上はたゞ、神佛のおん功力、頼む心に相鎚を、求めんより他は無し。南無や氏神、稻荷明神わが身命に替ゆるとも、あはれ最勝の御劔を打出ださせて給れと仰ぐ御山の初紅葉、赤き心に吹き通ふ、下向の道の夕嵐。ゆくての方に老翁の、いさも氣高き姿にて、忽然として現はれ給ひ(中畧)虚空はるかに聲あつていかに宗近御劔を、打つべき時は只今なるぞ。頼めや頼め唯頼めと、壇上に現はれ三拜の膝を屈して直りける(中畧)打てや、と鐵さりのべ、教への鎚をはつたぞ打てば、ちやうと相鎚、ちやうと、打ちかされたる鎚の音は、天地に響きて影し(中畧)かゝるめでたき業物を、我が敷島の精神となし、四海を治めたまはんには、高麗もろこしの民草も御稜威のもこにうち蹴き、五穀成就や君萬歳と、傳ふる鍛冶の道ひらくなほ行末を守るべし。これまでなりさいひ捨て、又むら雲にさびうつり稻荷の峰にぞ歸りける。

明鳥六花曙

山名屋の段

前
竹本 豊澤 太夫
竹本 豊澤 太夫
豊澤 廣太 助

後
竹本 七五三 太夫

鶴澤 綱造

胡弓 鶴澤 寛弘



明鳥六花曙

山名屋の段

明和六年七月幕府御賄方伊藤伊左衛門の
梓伊之助と吉原の遊女三芳野との情話が新
内節に唄はれて、安永元年鶴賀若狭掾の「
明鳥夢泡雪」となり、この新内「明鳥」が
やがて大阪の大西芝居にかゝり大當り大成
功を収めました。これに刺戟されたものが
嘉永六年二月大阪新築地清水町濱の竹本綱
太夫の操芝居で「明鳥雪の曙」と題して山
名屋の段を出しました。越えて翌安政元年
四月道頓堀竹田の芝居で興行された時は外
題も今日の「明鳥六花曙」となつたのでご
さいます。

吉原山名屋の遊女浦里は春日屋時次郎と
深く契りを交して、禿のみどりと呼ぶ娘ま
で生した仲であつた。

時次郎は紛失した御主人の重寶臥龍梅の
一軸を詮議の爲めに苦心してゐたが、その
一軸こそ、この山名屋の亭主勘兵衛が横領
してゐるのだつた。その事を知つてゐる亭
主勘兵衛は、だから浦里を時次郎から引き
離さうとして二人を逢はさない様に仕向け
た。堰かれた時次郎はそれでも忍んで會ひ
に来るのだつた。

其の日も山名屋の塀外まで忍んで来た時
次郎は二階の浦里と悲しく目配せするより
途はなかつた。然し、髪結お辰の情ある計
ひで、やつと裏切戸から身を山名屋に入れ
る事が出来た。それは悲しい嬉しい達瀬だ
つた。積る口説の数々も束の間、遣り手婆
のおかやに引き立てられて、浦里は禿みど
り諸共、亭主勘兵衛の前に投げ出され、折
檻を受ければならなかつた。

身を離して二階から、この地獄の責苦に

傾城	浦里	桐竹龜松
禿	みどり	吉田光次
髮結	お辰	吉田光造
時次	郎	吉田玉枝
やりて	わかや	桐竹紋太郎
亭主	勤兵衛	吉田玉徳
手代	彦六	桐竹紋十郎

泣き號ぶ浦里みどりを見てゐる時次郎の胸は、千々に引き裂かれる様だつた。

「アノ床に懸つ金の岡の一軸、匿藏などには片腹痛い。コリヤ、この事を時次郎にたのまれたに違ひない。白狀せい。時次郎は何處に居る。夫れを吐かせ……」

——嬉しや、亭主の口から自づそ日頃尋ねる寶物の在り所が判つた。これこそ神の助け……。而も浦里に横懸幕のこの家の手代彦六の己惚れから、浦里、みどりの繩は解かれた。二人は九死に一生を得た。

屋根傳ひに庭に下り立つた時次郎は、素早く寶の一軸を奪ひ取つた。まご／＼まご／＼つく彦六を残して時次郎は、娘みどりを脊に負ひ、浦里の手をさつて切戸口から何處までもなく逃れ出る。

折から明の鳥が飛び交ふて、春の濃雲は身にしみて冷たい……。

(佐和利) 山名屋の段

涙ながらに時次郎、何時迄くどき歎いて、歸らぬ今の我身の不運、逆も生きては

居らぬ此の身、和女も共にさいひたいが、二人一緒に死すならば、跡で可愛や此縁はどうなるものぞ不惑やな、今死ぬる身を存へて、我去き跡で一片の、回向を頼む浦里さ、聞く程せきくる涙ながら。ソリヤ餘りじや情ない、今宵別れて私が身や、可愛縁は何さならうと思わんす、死なねばならぬ覺悟なら、三途の川もコレ此様に、親子手を執り諸共さ、何故にいふて下さんせぬ、氣強い男さばかりにて、身を顧はして泣居たる、心ぞ思遣られけり。

浦里重き顔を上げ、誰を恨みん身の毘科戀故今の憂き苦勞、我身一つは厭はれど、何にも知らぬ此縁、斯る憂目を見せるのも皆私から起つた事、堪忍してたも怪へてたも、子供心に聞分けて、親は目先にあるがら、腸氣浮氣の酒事に、所體崩して殿御の事、逢たい見たいさしどもなき、母を持つたが其方の因果、因果同志が報ひ来て、悪縁深き契じやさ、前後も更に辨へず、庭に咬付き伏轉び、流す涙は春雨に、雲解け亂す許りなり。

夜の部

末廣加利

大傘名 大郎冠者 竹竹竹竹竹竹 住相生太

傘太

引ぬき團子賣

耶冠

賣者名

鶴野豊鶴野鶴野竹豊竹竹竹竹 友喜仙友八重吉八松濱源相住 左衛門 十島太太太 造市造門松平造郎夫夫夫夫夫

女團子賣

お杵

福造

豊鶴野豊鶴野豊鶴野竹竹竹本 澤澤澤澤澤竹竹竹竹竹 桐吉田 狼寛新叶松呂司宮津 二 三太之 和太 三郎 郎弘郎郎輔夫夫夫



末廣加利

引ぬき團子賣

末ひろがりは目出度い能狂言として慶祝の際には古來から屢々上演されたものでございます。同じ材料である紙と竹を用ひて製作されたものですが、用途が全然異つてゐる扇と傘、即ち大名は扇を扇んだのに對して大郎冠者は傘を求めて來ました。然し擴がる点に於て一致してゐるといふ比喩

決戰服裝勵行

一億の憤激を

！に衛防土國

に富む一笑話で、この末廣がりに大東亞建設と八絛一字の寓意を見るのでございます。本曲はさきに「紅葉狩」「名和長年」等の新作淨瑠璃を發表せる西村紫紅山人と鶴澤重造の協力になる、既に好評の力作でございます。

一谷嫩軍記

熊谷陣屋の段

中竹本漬 太夫

鶴澤寛 治郎

豊竹古靱 太夫

鶴澤清 六

妻 相 模 吉田 文五郎

堤 軍 次 桐竹 紋司

藤 の 局 吉田 榮三郎

梶原 平次 最高 吉田 玉徳

石 屋 彌 陀 六 桐竹 門造



青葉の苗

一谷嫩軍記

熊谷陣屋の段

寶曆元年十二月十一日から豊竹座に上場
作者としては浅田一鳥、浪岡鯨兒、並木正
三、雄波三藏、豊竹甚六等五人の名を連れ
て居る上に、故人並木宗輔の名をも掲げて
居ります。その主材は平家没落の哀史中、
一谷に於ける平教盛と熊谷直實との組打、
藤原俊成と平忠度との訣別、平忠度と岡部
六彌太との合戦等からなり、全五段の中、
二段目の「一谷陣門から組打に續いて」「流
しの枝、林住家」になり、次いで三段目の
「脇ケ濱、寶引」からこの「陣屋」へを發
展して行く美しくも哀しい戦物語で、熊谷
陣屋の段が全篇の山となつてゐるのでござ
います。

爰は攝州生田の森なる熊谷次郎直實の陣
屋で、木戸の外の櫻木に近く、「一枝を伐
らば一指を切るべし」の制札が立つて居り
ます。

落人よ成つた平教盛が、室藤の局は暫時の
隱家を頼みに爰へ来て、圖らずも熊谷が妻
相模に會ひ、我子教盛の敵討に助太刀を頼
んだり致します。藤の局を兎も角も奥へ忍
ばせた相模が、我子小次郎初陣の様子や如
何と案じて居る處へ、直實が思案の體で立
歸りますので、相模は小次郎の初陣に心引
かれるまゝに、合戦の模様を尋ねるのに對
し直實は、小次郎の比類無き働きから、ま
た自分が教盛の首級をあげた功名を語りま
す。それを物陰で聞いた藤の局は我子の敵
と不意に切掛けるを熊谷は何奴と引揚へま
したが、藤の局と聞いて悔り上座に直して
畏まります。と云ふは、平家世盛りの頃、
相模は藤のお局に仕へた者、一と昔の以前
勤番の武士佐竹次郎と馴染み、御所を拔出
で東へ下りましたが、其の佐竹次郎こそ今
の熊谷次郎直實であつたのです。今は藤の

熊谷次郎直實 吉田玉助
源 義 經 吉田榮三
百 姓 大 せい
軍 兵 大 せい



太夫相勤申代
榎下古報
曲豊竹古報

局も、戦場の際と詮方なく諦め、總て直實には教盛の首桶抱えて、實験に供へ様と立つ折柄、源義經が現はれて其首級を實檢し、制札の意を察してよく討つたに褒めまます。熊谷が出陣の支度に興へ入つた跡、前に石壁の彌陀六引立て、詮議に來て居た梶原景高、二心ある義經、熊谷を鎌倉殿へ注進

さ、呼ばはり乍ら駈出しましたが、彌陀六が石壁の手裏劍に打たれて息絶へます。彌陀六が其儘行過ぎ様とするを、呼止めた義經が、彌平兵衛宗清と看破るので、其眼力に驚いた彌陀六は、平治の亂の折、池殿と合せて頼朝義經を助けずば、平家は今に榮えんものと非憤の涙に暮れます。やがて義經は一間から鐵櫃を取出させます。そ

の中をあらためた彌陀六は、教盛が入つて居るので悔り致します。相模は、我子小次郎が教盛の身代りに死んだを茲で始めて知つたのです。義經は其切なる心を察し、教盛ならぬ小次郎の首級に名残を惜ませます。總て義經が、西國出陣の時至れり、用意如何にぞ熊谷を勵ますに、直實が甲冑を脱げば曇染の衣、頭も青い今道心の姿で、改めて永の暇を願ひますので義經も無理ならぬ望みを許します。直實は驚き悲む相模を制して、向ふは西方彌陀の國、黒谷の上人を師と頼み、名も蓮生と改めて一笠一杖の僧とならむ、さ心の中を語り、主従、親近、敵味方共に名残を惜みつつ、直實は一人別れ、一念彌陀佛即滅無量罪、十六年は一昔あゝ夢であつたなア、さほろりとなつた氣を取直すさ黒谷として別れ行くのでございました。

榎下古報太夫の獨壇場、熊谷陣屋の久々上場でございます。何卒御期待下さいませ。

壺阪観音靈驗記

澤市内の壺坂寺の段

壺坂 竹呂 太夫門
 竹友 太夫門
 野澤 伊達 衛門
 喜左衛門 夫

鶴澤 叶 太郎

豊澤 景 二郎



壺阪観音靈驗記

澤市内より壺坂寺の段迄

この「壺坂」は名人豊澤團平とその妻千賀との協力によつて生れた明治時代の新作淨瑠璃中、最も人口に膾炙した曲であります。元來この「壺坂」は「西國卅三所観音靈驗記」と呼ぶ各寺一段の形式をもつ作者不詳の合作物の中の一節の中に當るもので恐らく西國第六番の札所大和壺坂寺に流布してゐる縁起に加筆したものらしく、それを更に千賀女が補筆改作して成つたものが現在の「壺坂」で、これに夫の團平が節付

けして始めて「壺坂」が生れました。但し團平の節付けも今日の「壺坂」に大成するまでには前後二段の改訂を経て今の様なグツミ派手で流麗巧緻なものになつたのでございませう。

澤市の女房お里は座頭の妻には惜しい程、美しいと云ふ近所での評判で、それが盲目の澤市には秘かになれたまじかつたのです。それにお里は毎夜七ツの鐘が鳴るさそつと家を抜け出して行くのでお里に誰か思ひを通はず男があるに相違ないさ澤市は思つてゐました。

さある夕方、澤市は今迄不善に思つて居た事などを起りの聲さへ交へてお里に語るのでした。それを聞いたお里は、その譯を今まで話さなかつたさば云ひ乍ら、夫の首ひ分が自分の心に引き絞べてあんまりなのに泣きくづれました。その譯は澤市とお里はもさもさ従兄妹同志一緒に育てられた仲で、澤市は痲瘡にかかつて眼までつぶれてしまつたのです。然しお里は貧苦の中にも夫を思ふ一心に働き、澤市の眼病平癒のた

女房 お里 桐竹龜松

座頭 澤市 吉田光造

観世音 吉田文枝

米英撃滅

必勝の決戦へ

銃後一億

皆特攻隊だ！

め、この三年の間さ云ふもの雨の夜も雪の夜も壺坂の観音へ跣足詣りをつゞけてゐたのでした。

その譯を聞いて澤市は貞節な妻に對して自分の邪推がはづかしかつたのです。すべてを打開けたお里は、澤市の心を引立て、一緒に観音様へ御禮に參詣してみたらさ二人はつゝまじやかに西國六番の札所壺坂観音の御寺に頼づいて御詠歌を上げました。

この眼が癒るものが、癒らぬものが三日の間此處に籠つて祈らうと、澤市はお里を

その仕度到家へ歸してしまひましたが、澤市はもう決心して居たのでした。あの貞節な妻にこの上面倒を見て貰つても所詮は治るこさのない業病、いつそひさ思ひに谷へ身を投げてしまはうと思つたのでした。

杖を力に澤市は裏山へ上つた。遠く聞える谷間の水音をしるべに、唯未來を祈つて身を躍らせて谷底深く身を投げた澤市でした。

一人残して來た夫の身が案じられ、お里は御寺へ立歸へつてみるさ夫の姿は見えないので、狂氣の様に澤市の行方を尋ねました。さ、はるか谷底にあり／＼と澤市の姿が見えるのでした。澤市を失つてお里はどうして生き甲斐があらう。お里も澤市の跡を追つて谷間へ身を投げたのでした。

やがて妙なる音楽につれあり／＼と姿を現し給ふたのは壺坂の観世音でした。二人は眠りから覺めた様に眼を開きました。お里の真心に佛も感じ給ふたのです。二人の命を救はれたのであります。さう云へば澤市の眼も開いたのでございます。

觀賞おぼえ

昭和二十年二月 日

新作節 分

伊賀越道中双六

小 鍛 冶

明 烏 六 花 曙

末 廣 加 利

一 谷 嫩 軍 配

壺坂觀音靈驗記

文樂座小史 (昭和十九年三月調査)

- 竹本座創立(現今ヨリ二百五十九年以前)真享元年
二月(道頓堀西ノ芝居)
- 文樂座發祥(現今ヨリ約百五十年以前)天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル
- 第一次稻荷社内時代
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル
- 西横堀新築地演時代
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル
- 第二次稻荷社内時代
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル
- 松島千代崎橋時代
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル
- 御靈神社内時代
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル
- 松竹合名社繼承
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承
- 御靈文樂座燒失
大正十五年十一月二十九日
- 隨時興行時代
昭和元年ヨリ昭和四年マテ道頓堀辨天座ヲ始メ其他隨時興行
- 四ツ橋文樂座創立
昭和四年十二月以來現在ニ至ル

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆探御承知の通り我大阪に於ける總士藝術、三位一体の人情淨瑠璃の日本唯一の公演場でございます

文樂座人形淨瑠璃は 昔に大阪の誇りとする舞台藝術のみならず日本に於ける古典禮台藝術の至寶として世界に誇るべきものであります、従つて開演毎にこの大使命が全う出来ますやう、皆探の御期待に背かぬ御、皆探に御満足して頂けるやうにと一同不斷の努力を致して居りますが尙御氣付きの点は御客探の御聲として承りたく存じます

貴重品は 各自にお持ち下さいませ、お摺席をお立ちの時は御携帶を願ひます
お煙草は 一階、二階席下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひを致します。お席では御遠慮下さいませ。

お食事は 西側、階下に大食堂が御座ります。
賣店は 一階西側休憩所に御座ります。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ります。寫眞撮影は絶対にお断り申上ます。

場内にて 寛風撮影は絶対にお断り申上ます。
御休憩の間は 二階西側に大休憩所の設備が御座ります。御辨當御持參の御方様は何卒御利用下さいませ。

出演者 病氣其他の事故にて出場不能の場合は乍勝手代役にて相勤めまされは右様め御諒承を願ひます。

★お客様へ特にお願申上ます
物資不足の折柄、洵に恐れ入りますがお下駄履きのお客探は晴雨にかかわらず上草履を御持參下さいませ、特にお願ひ申上ます。

尚、靴、草履のお客探はそのまま入場して頂きますので至極便利でございます

松竹株式會社 文樂座
支配人 大橋照夫

電話南(7)

三〇三二番
三〇七八番
四七一一番

昭和二十年二月一日印刷
昭和二十年二月二日發行

大坂市雨區久左衛門町八番地
發行所 松竹株式會社大阪支店・發行者 鳥江鏡也

大坂市雨區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店

大坂市東區和泉町一丁目二二
印刷所 ミカド印刷合資會社

一部金二十錢

